



「終わるのでなく 始まるのです」

住 職

いのちを粗末にする事件が次から次へ報道されると、聞きなれて驚きが薄れてきます。古歌に「驚かすかいこそなければ 群ら雀 耳なれぬれば 鳴子にぞ乗る」と詠われる通りです。秋の収穫期の稲田にカラカラと音を立てる鳴子を設置して雀を追いかうが、鳴子の音に慣れてくると雀は驚かないそうです。

親の幼児虐待行為、老人施設での職員による入所者虐待、無差別殺人などの事件がマスコミをにぎわせている昨今です。親子げんかで「頼んでもいないのに勝手に生んで」と口走る子供。「こんなことなら死んだ方がいい」と自死を思う人。また将来に希望が持てずに死を望む人もいます。「死」によって、何もかも解決すると短絡的に判断してしまう。これは、なにもかも帳消し

になる、この煩わしさや辛さから逃れられると、見境もなく行動して、その結果、取り返しのつかないことになってしまふ悲しい発想です。

私たちは思うようにならないと頭に血が上ってヤケを起こし、いのちを軽くあつかいやすい。自分のいのちは先祖のいのちを受け継いでいます。例外はありません。「一切の有情（生きているものすべて）は、みな世々生々の父母・兄弟なり」と親鸞さまは仰せられます。心に刻みこんでおきましょう。

何年くらい前からでしょうか「しゅうかつ」という言葉を耳にするのは。最初に耳にした時「就職活動」つまり「就活」のことだと思いました。そうではなく「終活」でした。「人生の終わりが近づくと自分の死後、子供などに迷惑をかけないようにと、身の回りを整理する活動」のことでした。

「人に迷惑をかけてはいけないよ」ということは幼いころより教わったことです。この場合の「人」とは「他人」の事であって、「自分の子供」をさしてはいなかったようです。「子供に迷惑をかけないよ

うにする」ことが、今の流行になっているように感じます。この考えは悪くはないが、良くはない。自分が産んで育てた子供を「他人視」して、頼りにしていないから良くないのです。人間としての成長を期待していいのです。人それぞれに意見は有ると思いますが、家族として接する気持ちが無くなっていないだろうか。「子供の為に、子供の為に」と一生懸命になって子供を育てます。軽い気持ちで子育てをしたものは誰もいません。

人はこの世に生をうけたものは、早いか遅いかの別はあっても必ず終わりがあります。体力・能力の衰えはとまりません。人間生活の終わりに何かをしておこうと思う。その時まずは子供に迷惑をかけるようにしようと考えます。しかし、それが必ず子供の為になるでしょうか。むしろ子供に後を託すことが、子供の人間として



の成長を促すことにはならないでしょうか。迷惑をかけるし、かけられもする。責任を持つてもらおうことは、その人を信頼している証でしょう。欲望にブレーキをかけることを知るのが大人です。人にやさしくできるのが大人です。同時に、人に人生の厳しさを教えるのも大人です。甘やかすだけが親の愛情ではないはず。

人間のいのちの終わりは、終わってしまうのではなく、新たないのちが始まることです。「仏としてのいのち」が始まるのです。「終わり」ではない。無量寿という限りなきいのちを生きる道が待っています。南無阿弥陀仏を聞きましょう。称えましょう。「なぜ人間に生まれたのか」を自分自身に問う縁に会う時、阿弥陀さま・親鸞さまの声が心身に響くのです。



七高僧シリーズ

「師主知識の恩徳・・・」道綽禪師

副住職



前回ご紹介させていただいた曇鸞大師が往生された二十年后にあたる五六二年に道綽禪師はお生まれになりました。場所は今の山西省で当時は北斉という国でした。

当時の中国は南北朝時代といわれる時代であり、北方には道綽禪師の居られる北斉、その西には北周という二つの国がありました。北周の武帝は仏教を弾圧する政策をとっていたのですが、その北周に北斉が滅ぼされてしまいます。その結果、道綽禪師も出家して三年目の十六歳のときに仏教弾圧に遭われ、還俗させられたようです。数年後、武帝が亡くなると再び出家して学問・修行に励むことができるのですが、戦乱の世に生まれ、仏教弾圧を経験したことが後に道綽禪師が末法思想と結びつく要因になったのでしょうか。末法思想はこの道綽禪師によって浄土教と結びつくかたちで広まっています。

お経によれば、釈尊が涅槃に入られた後五百年間は仏陀の教えも実践も行われ、悟りに至るものもいる正法の時代。その後千年は像法と違って、教えと行は残るが、悟りに至るものがない時代となります。そしてそれ以降は末法の時代となり、教えが残るのみであると。さらに一万年後には終に教えさえも滅してしまう滅法の時代が来ると説かれます。まさに道綽禪師が生きた時代はちょうど末法の時代が始まったときにあたります。

仏道には自らの能力を信じて厳しい修行に励む「聖道門」と、力のない凡夫をなんとか助けたいと願われている阿弥陀仏の本願にしたがって浄土に生まれて往く「浄土門」の二つの道があることを道綽禪師は教えられました。そして、この末法の世に生きる衆生の力では聖道門の教えでは悟りは得られないこと、浄土門の教えこそが私たちの通るべき道であることを明らかにされたのです。

もともと若いころは涅槃経を学び研鑽を重ねて二十回以上も講義をされていましたが、四十八歳の時、立ち寄られた玄中寺にて曇鸞大師の人徳を讃え

る石碑をお読みになり、深く感銘を受けて浄土教に帰依されたと伝わっています。しかも、その曇鸞大師を慕って玄中寺に居を移され、八十四歳で往生されるまで二百回も観無量寿経の講義をされました。そのときの講義記録とも思われる道綽禪師の唯一現存する著書が「安樂集」です。

道綽禪師は阿弥陀仏とその浄土のすばらしさを繰り返し讃嘆し、阿弥陀仏を信じて浄土に往生することを勧めました。

正信偈に「万善自力貶勤修 円満徳号勸専称」とあります。悟りに至るために自分の力をたよりに励むことは誤りであるとして退け、すべての功德が円満に備わった「南無阿弥陀仏」のお念仏を専ら称えることを人々にも勧められました。

そして親鸞聖人は正信偈に「一生造悪値弘誓 至安養界証妙果」（たとえ、一生の間を通じて悪をなすものであっても、あなたを必ず浄土に生まれさせて仏にする、という阿弥陀仏の誓願に遇うことになれば、その誓願のはたらきによって安養の世界であるお浄土に生まれて悟りに至る）と著されています。

夏期法座

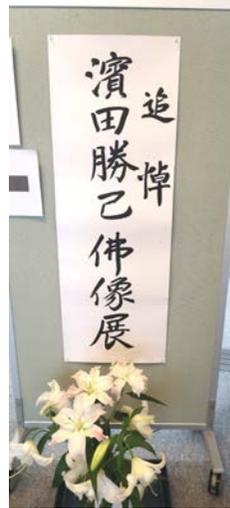
八月十八日、第三十八回信行寺夏期特別法座が今年も行われました。しかし、残念ながら今回は、コロナウィルスの影響を考え、食事をとることをやめ、午前中のみの実施としました。住職・副住職もマスクをしての法話となりました。窓を開けて換気をして対策をとりましたので、涼しい中とはいえませんでした。今年も参加いただいた方々ありがとうございました。最後は、副住職の馬頭琴と木下さんのピアノの恩徳讃を聞きました。



濱田勝己さんの仏像展示

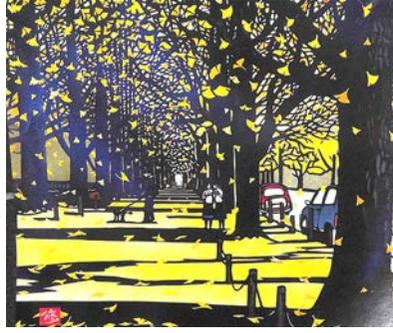
今年、住職の弟、浜田勝己さんが往生されました。勝己さんは若くから仏師を志し、亡くなる前日まで数々の作品を作り出してきました。以前から信行寺にある仏像は、本尊の阿弥陀如来像も含めて濱田勝

己さんのものであります。そして、今回百体を超える作品が信行寺に保管されることとなりました。その一部を先日展示いたしました。



法語カレンダール

今回は、本願寺出版社の法語カレンダール、十一月の言葉の説明をします



拝おがまない者ものも
 おがまれている
 拝おがまないときも
 おがまれている

「無理をせんといてください」「無理をしないで休んでいてください」腰が曲がって ひどく小さくなってしまった老妻に 何べんも気づかってもらいながら 土手の草を刈る

何だか うれしく 何だか しあわせで……

「拝まない者も おがまれている 拝まないときも おがまれている」

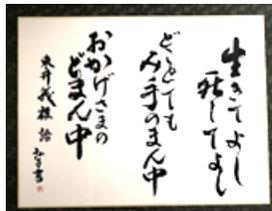
「ここが み手の まんなか」と、 土手の草を刈

らせてもらう

何だか うれしく 何だか しあわせで……。

「何だかうれしく」という東井義雄先生の詩の一節です。「拝む」は漢字、「おがむ」はひらがなになっています。「拝む」は私の動作と考えられます。そして、「おがむ」は続いて「ここがみ手のまんなか」とありますから、仏さまのはたらきなのです。私を拝んでいるのではなく、み手のなかにこの私を包み込んでいらっしゃる、というのです。

兵庫県豊岡市にある浄土真宗本願寺派の東光寺で生まれた。小学校一年生の時、母と死別。貧窮による旧制中学校への進学を断念。師範学校卒業後、定年に至るまで、小学校教員として教育に携わる。



日頃の疑問を考えよう

左記は京都の大谷本廟に寄せられているお悩みランキングです。今回はその第一位について紹介します。

- 第1位 納骨・お墓
 - ・大谷本廟に納骨するには？
 - ・故郷のお墓を護持できない
- 第2位 法事の決まり事
 - ・法事は命日に？
 - ・お布施はいくら？
- 第3位 法名・帰敬式
 - ・法名とは何？
 - ・どうすればもらえるの？
- 第4位 お仏壇・お供え
 - ・お供えは何がいいの？
 - ・引っ越すときどうすればよい
- その他 所属寺・過去帳・お経

大谷本廟は、浄土真宗の宗祖・親鸞聖人のご廟所（墓所）です。墓地や納骨堂も設けられています。大谷本廟への納骨には、祖壇（そだん）納骨・無量寿堂納骨・墓地納骨の三種類があります。

祖壇納骨について、詳しく紹介しましょう。「祖壇」とは、親鸞聖人の御影が安置され、ご遺骨が納

められている場所です。祖壇の両側には歴代宗主とお裏方のお墓があり、祖壇の前には拜堂「明著堂」があります。聖人のご遺徳を慕い、そのおそばにという思いから、祖壇の近くに大切な方のご遺骨を納めてきたのです。今では年間一万二千もの納骨が行われていきます。祖壇納骨を行うには、納骨届（所属寺の住職の署名、押印）が必要になります。また、合葬なので納めたご遺骨はお返しできません。

無量寿堂納骨には、信行寺所有の納骨壇もあり、毎年十月バスでお参りに行っています。昔から、分骨して小さい骨壺を大谷本廟に、中ぐらいの骨壺は各家のお墓に納骨する習慣があります。

最近では、先祖からのお墓を処分される方も増えました。それぞれ事情があり、真剣に向き合われているからこそ、後々に迷惑をかけられないと考える方も多いようです。親族や家族共通理解を図り、よりよい方向を見つけてほしいと思います。



信行寺行事予定とご案内



◇報恩講法要

十一月二十一日（土）法話 住職・副住職

午後二時より四時までです。

年間計画から変更です。コロナ禍の現状を考え、一日のみの法要とします。お間違えのないようお参りください。

◇新春初法座

令和三年 一月五日（火） 午後二時より

お正月をお寺でお迎えしましょう。一緒に年の初めのお勤めをし、その後、法話をご聴聞ください。また、歌と楽器の演奏を楽しみましょう。

今回、会食は控えることと致します。

編集委員より

国内で旅に出ると、必ず神社仏閣に出逢います。お寺に通うようになり、真宗門徒の私は神社にはためらいを感じていました。浄土真宗は「神祇不拝」の教えだからです。歴史を振り返ると明治維新の一八〇八年「神仏分離令」が布告され、寺院の廃止や合併が進み、神社から仏教色を除き、神道国教化を目指す新政府の目的が露わになり、所によっては「廃仏毀釈運動」にエスカレートしました。事態を重く見た仏教界、特に島地黙雷らの真宗僧侶が江藤新平らと団結して強く中央政府に抗議運動をしたので、廃仏稀釈が鎮静化すると共に、政府の神道国教化も挫折しました。しかし、新政府は「神道は宗教ではなく、皇室や天皇家に繋がる古い歴史を持つもので、仏教徒であれ、キリスト教徒であれ、国民の崇敬の対象であるとして、神道を宗教ではなく宗教を超える存在に格上げしたのです。このような歴史から神道は宗教ではなく「古くからの日本的慣習」であると位置付けて良からうと考えます。さすれば、私にとって信心の宗教は浄土真宗のみで真宗門徒として「神祇不拝」も守れます。

篠島益夫